

礼拝説教

2020年11月1日 茂木

聖書 ヨハネの福音書13章12～20節

説教題 互いに足を洗い合う



1. 主が弟子たちの足を洗われたことの意味

主イエス様は十字架におかかりになる前夜、夕食の席から立ち上がられると、弟子たちの足を洗われました。弟子たちは大変驚き、恐縮しました。当時、こうして他人の足を洗うのは奴隷がする仕事だったからです。それも、ユダヤ人の社会では、異邦人の奴隷がする、一段卑しい仕事でした。

主イエス様がなされたことにはいくつかの意味がありました。まず、主が私たちに罪から救い、きよめてくださるのは主イエス・キリストであることが、このことの基盤にありました。主はペテロに「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです」¹とおっしゃいましたが、ここで「水浴」は、主イエス・キリストを信じて受けるバプテスマ（洗礼）をさしています²。私たちはまず、主イエス・キリストの十字架の犠牲を信じて救われ、神様の御前に罪が精算済みのきよい者としていただくのです。私たちの主であるお方に仕えていただいて、そのいのちの犠牲によって、私たちは罪が赦され、神様に受け入れていただけるのです。この、主の十字架による救い、それは一度限りの、完全な罪のきよめであり、永遠の救いです³。唯一まことの神様を信じ、イエス・キリストを自分の罪からの救い主と信じるなら、そのとき、人は神様の御前に本質的にきよいものとされるのです。水のバプテスマは、そのことをしるしするものです。

ペテロは主がなされることの意味がわからず、主から離れたくない一心で、「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください」とお願いし、主から先ほどの「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです」とのおことばをいただきました。そのことから、主が弟子たちの足を洗われたことそれ自体は、信じたそのときにいただく本質的な罪のきよめではなく、生きていく上で犯してしまうさまざまな罪のきよめを表わすものであったことが明らかになりました。罪からのきよめは、生涯ずっと続くものであり、それも主のみわざなのです。キリスト者は、主と交わりながら生き、日々主に洗いきよめていただきながら、神様の永遠の御国に備えるのです。

1 ヨハネ13:10

2 コロサイ2:12。ローマ6:4、マルコ16:16ほか参照。

3 ヘブル7:24～28、10:10～25参照。

ところで、この罪をきよめる働きは、救い主であるイエス様にしかできないことです。けれども、このことをお教えになった上で、主は弟子たちの足を洗われたことのもう一つの意味、私たちが主にならうべきことをお教えになりました⁴。それは、弟子たちが互いに仕え合うということです。

2. 信仰の兄弟姉妹を愛する

主イエス様は、弟子たちの足を洗い終わると、上着を着けて、また、もとの席にもどられ、こう言われました。「わたしがあなたがたに何をしたのか分かりますか。あなたがたはわたしを『先生』とか『主』とか呼んでいます。そう言うのは正しいことです。そのとおりなのですから。主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。」

先生であり、主人であるお方が、弟子の足を洗ってくださった——当時、人の足を洗う仕事は、奴隷のする仕事でした。それは最も卑しい仕事で、同じ奴隷でもユダヤ人の奴隷はしなかったほどでした。主は、弟子たちのために、その最も卑しい奉仕をしてくださったのです。この主を模範として、今度は弟子たちが互いに仕え合う、それが今日のところで教えられていることです。それは少しあとで、「互いに愛し合う」⁵ということに言い替えられていきます。

私たちは、「キリスト者は互いに兄弟姉妹である」と、口では言っています。でも、本当に心から兄弟であり姉妹であると思っているのでしょうか。ある人は受け入れても別の人には受け入れない、あるいはだれかを差別するという事はないのでしょうか。もし、この世の人たちと同じように、好きな者どうしだけで交わり、そうでない人とは口もきかないということがあつたら、キリスト者としては問題です。もし憎しみの対象としてしか考えられない人がいるとしたら、それは大変悲しいことです。もっとも、私たちはみな罪人ですから、「仲の悪い兄弟」とか「ウマが合わない姉妹」というのは、現実には存在するでしょう。でも、だからといってその人を排除するのではなく、その人を受け入れ、その人にも同じように仕えるのです。

ヨハネは、別のところで、「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人

4 この順序も非常に大事です。主の十字架による救いを抜きにして、仕えるということをお先に考えるなら、聖書の教えとはまったく違う教えになってしまいます。キリストがどうされたかを模範に、博愛主義を構築するのは、美しく魅力的なことに思えるかもしれませんが。実際、17・8世紀以後の西洋の思想には、この例が数多く見られます。でもそれは、キリストの神性を否定し、偉大な道徳教師としてしか見ていないものです。それは聖書を参考にしてはいるかもしれませんが、人造宗教（思想）であり、キリスト教の異端の1つにすぎないものです。それは一時、人の心を引きつけても、永続性はありませんし、容易に変質してしまうものです。

5 ヨハネ13:34、15:12・17。

は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません」⁶と書いています。私たちはしばしば、神様に対して、またイエス様のためになら、どんなに卑しい奉仕でもできると考えます。けれども、本当に神様を愛しているのかどうかは、目に見える兄弟姉妹に対してどのような態度をとるかで測られるのです⁷。そして主がここで教えておられることは、互いに愛し合い、奴隷として仕え合うということです。

そうは言っても、私たちは本当に愛のない者で、自分の力で愛することはできません。そんな私たちが、兄弟姉妹を愛することができるようになるのは、自分自身が主イエス様から愛されていることによります。主であり師であるイエス様が、いのちを捨てて、この私を愛してくださった、十字架の上で現わされた主の愛を知るときに初めて、私たちは主イエス様の模範に従うことができるようにされます。

それでも私たちには、どうしても愛することのできないと思えるような兄弟あるいは姉妹がいるかもしれません。けれども、その兄弟（姉妹）も神様に愛されており、主イエス様はその人のためにもいのちを投げ出してくださったのだということを知りたいと思います。主が、自分のいのちを犠牲にするほど大事に思っておられる兄弟／姉妹を愛することは、主を愛する者にはできないことではない、はずです。好きになれと言うものではありません。好きとか嫌いというのは感情であり、私たちにはどうすることもできないことがあります。でも、私たちは感情によって愛することを求められているわけではありません。意志によって、主にならい、主に従うことによって、ほかの人に接し、仕えるのであり、主の喜ばれる態度をとるのです。そういう意味では、愛は意志なのです。主の弟子として、すべきことをし、言うべきことを言うのです。ある人はそれを「べきの愛」と言いました。それは人間の力では難しいことに違いありません。でも、私たちにはできなくとも、主の十字架を見上げ、主の御助けを祈り求めていくとき、私たちの内に住んでくださるお方、聖霊ができるようにしてくださいませ。

主は、「わたしが遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです」と言われました。キリスト者は一人ひとり、神様の使命があって、主から遣わされて、この世に置かれています。自分自身がそうであるように、信仰の兄弟姉妹も同じです。もし私たちが、信仰の兄弟姉妹を受け入れようとしなければ、それは主ご自身を拒むことになるのではないのでしょうか。それではイスカリオテ・ユダと同じことになってしまいます。

…ユダが主を裏切った理由には、互いに仕えるということもあったのかもしれない

6 Iヨハネ4:20

7 マタイ25:31～46参照

ん。この日、弟子たちは、自分たちの中でだれが一番偉いかを議論していました⁸。弟子たちの中には、主が政治的なメシヤとして来られたと思っている者もいました。彼らは、主が支配者になったとき、自分も主の右や左にいて、人々を支配したいと思っていました。ユダもそうだったのではないのでしょうか。でも、主の弟子は仕える者であると示され、「互いに仕え合いなさい」と言われたとき、「やってられないよ！」と思ったのではないかしらと思うのです。

主は言われました。「これらのことが分かっているなら、そして、それを行うなら、あなたがたは幸いです。」——主のみこころに従うとき、主は私たちとともにいてくださり、私たちのなすことを喜び、豊かに報いてくださいます。私たちは、謙遜な者にさせていただいて、主の模範にならって、互いに仕え合う道を進みたいと願うのです。

3. 2つの誤った考えを避ける

この、互いに仕え合うということに関して、2つの誤った考えを避けることを加えておきたいと思います。1つは、自分が仕えられることを求めて、ほかの人をさばくこと、もう1つは、ほかの人の愛を受けないように、歯を食いしばって仕えられることを拒むことです。

(1) 自己中心な要求が正当化されるのではない

まず、「互いに仕え合いなさい」と言われると、自分が仕えられることばかりを考える人があります。それで、ほかの人が自分によくしてくれないと言って、兄弟姉妹を非難し、さばくのです。あるいは、ほかの人が自分に仕えることを当然のことだと思って、何の感謝もしないのです。

それは自己中心な罪です。その人は、ここで主イエス様がお教えになっていることを少しもわかっていないのです。と言うより、そのような人は、ここで教えられていることから最も遠い人です。ここでのおことばは、他のだれでもない、このおことばを聞く人自身に——私自身に、あなた自身に——語られているのです。私たちは罪深い者で、自分自身が仕える者であることを忘れていることがあります。

8 ルカ22:24～30参照。なおマタイ20:20～28、マルコ10:35～45参照。マタイ、マルコはだれが一番偉いかの騒動をエルサレム入城の前に記しています。イエス様がメシヤとして弟子たちに認識されるにつれて、しばしばこの議論があったと考えられます。あるいは、ルカは時間の順序で記しておらず、主が捕らえられる前の晩に弟子たちの足を洗われ（彼はこれを記していない）、互いに仕え合うことをお教えになったことを背景として、ここにこの議論を書いているのかもしれませんが。先週は前の解釈を採用してお話しました。エルサレム入城にしても最後の晩にしても、こんな時期になってもまだ、弟子たちは神様の御国についてまるでわかっていなかったのです。弟子たちのどの時点での議論を受けているにせよ、十字架におかかりになる前夜、この大事な最後の晩に、イエス様は自ら弟子たちの足をお洗いになり、御国の民の心をお教えになったのです。

「主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば」と、主は言われました。ここで教えられているのは、主の模範にならうことです。それは、だれかがほかの人に仕えてもらうために自分の権利を主張することを教えるものではありません。まったく反対で、自分の権利を捨てて、奴隷となって仕えんとことを求めるものです。私たちは、他人に求めるのではなく、「この私自身はどうか」ということをまず考えるのです。

（２）ほかの人の愛を受け入れる

けれども、もう一方で、ほかの人から仕えられるのはいけないことだと勘違いをして、兄弟姉妹の奉仕を拒む人もあります。皆さんの中にはそういう方のほうが多いかもしれません。でも、この教えは、愛されること、仕えてもらうことを禁止するものではないことも、覚えてたいと思います。とても単純なことですが、「仕え合う」と言うとき、仕える人は、仕えられる人がいなくては仕えることができません。でもしばしば、私たちは歯を食いしばって、兄弟姉妹の愛を受けないようにがんばってしまうことがあります。ほかの人に迷惑をかけまいとして無理をしてしまうのです。変なことですが、それはまじめで誠実な人たちの中に、よく見られることです。でもそれは正しいことではありません。

主イエス様が、弟子たちの足を洗われたとき、ペテロは拒んだのですが、そのとき主は言われました。「わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります。」——兄弟姉妹に仕えていただいて、神様の使命が果たされるということもあるのです。ですから、本当に必要なときに、兄弟姉妹の愛のわざを、心から感謝して受けるということも大事なことです。

私たちは、誤った極端な考えに陥らないように気をつけたいと思います。そして、主から愛されている者どうし、互いに愛し合い、仕え合う、麗しい関係を築いていきたいと思うのです。

4. 主にならう者への祝福

さて、主イエス様は、自ら模範を示され、ご自分の弟子たちの間では、つねにへりくだって、互いに愛し合うべきであることをお教えになりました。主は言われました。「まことに、まことに、あなたがたに言います。しもべは主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりません。これらのことが分かっているなら、そして、それを行うなら、あなたがたは幸いです。」

主に足を洗っていただいた者たちは、遣わされた者にすぎません。弟子たちは、自分たちをお遣わしになった主にまさるわけではありません。主と同じにはできない、弱

い私たちです。けれども、いのちを捨ててまで愛してくださったお方を見上げていくときに、私たちは、主にならう者とされ、主がなさったことのいくらかでもまねて、実践することができるようになるのです。主と同じにはできないでしょう。でも、主は別のところで、「弟子は師以上の者ではなく、しもべも主人以上の者ではありません。弟子は師のように、しもべは主人のようになれば十分です」⁹ともおっしゃいました。主のご愛を覚え、主にならって、愛の奉仕を謙遜にする人は、主から大きな祝福をいただくことができるのです。さまざまな困難があり、時に涙を流すこともあるかもしれません。でも、主のみこころに誠実に取り組んだ人は、御国の入り口で、私たちのまことの主人から次のようにねぎらいのおことばを聞くことになるでしょう。「よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」¹⁰ —— 主が私たちを愛してくださり、大きな大きな犠牲を払ってくださったことを覚え、主からねぎらいとお褒めのことばをいただけることを期待しつつ、主にならい、聖霊の御助けをいただきながら、主の喜ばれる歩みを心がけていこうではありませんか

わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

互いの間に愛があるなら、それによって、

あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。

ヨハネ 13:34～35

9 マタイ 10:24～25

10 マタイ 25:21・23